

終末期医療の現場 東札幌病院が道内初導入

「チャプレン」が心をケア

末期がん患者を診る終末期医療の現場を中心に「チャプレン」と呼ばれる人たちが欧米で活躍している。患者や家族、看護スタッフらの心のケアに当たる専門家だ。

国内では少ないが、東札幌病院（札幌市白石区）が道内で初めて配置し、成果を挙げている。

（荻野貴生）

■気持ちの整理促す

死を迎えようとする患者や家族らは、自らの存在の意味や価値を見失うほどの厳しい試練にさらされる。精神的な落ち込みはひどく、そうした人々をサポートするのがチャプレンだ。

本来は、病院や学校などの礼拝堂（チャペル）で働く牧師を意味する言葉。欧米での歴史は古く、刑務所や軍、警察にも配置されている。特定宗教の教義を持ち出すことはあまのなぐ、患者のあるがままを聴くことを身上とする。それによ

り、患者は「受け入れられた」と感じ、自分らしくなることができるといふ。

東札幌病院でチャプレンとして活躍する小西幸也さん（40）は国内大手電機メーカーを退職後、米国の病院でチャプレンとしての専門教育を二年間受け、ハーバード大神学部大学院を経て今年七月から同病院で患者の支援に当たっている。

チャプレンについて小西さんは「話をできるだけ自らの価値観に左右されず聴くことで、話す相手は気持ちや考えが整理され、今置かれている状況で『どうすべきか』が見えてくる。

「あるがまま」を受け入れ

患者や職員の精神支える

そうしたプロセスを手伝うのが役割」と語る。

具体的には仕事や家族、半生などを自由に語ってもらう中で、患者に自身で答えを見つけよう。例えば仕事一筋だった人が末期がんで入院した場合、チャプレンとの会話により「むしろ家族と過ごせる時間が持てるようになった」という現状肯定的な価値を発見したりする。

小西さんに話を聴いてもらったある女性（40）は「八年間、がんと闘っているが、心の中にあるすべてを話すことができ、前向きな考え方で、一日一日を生きてい

るようになった。自分を認める人が『変わったね』と言ってくれる」と話す。

■答え発見を手助け

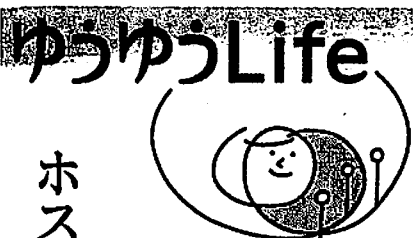
小西さんが活動の中心をおく緩和ケア病床（二十八床）では毎月十五〜二十人が亡くなり、多くの看護師が日々、患者の死に向き合う。看護師のストレスも大きく、燃え尽き感を感じる人もいる。

佐藤都恵看護課長は「ナースも患者の家族同様につらい。最期を見送れたことに達成感もあるが、つい泣いてしまふ。そうした中で小西さんの存在は重要だ」

と語る。看護師の青田美穂さんは「つい小西さんに話をしたくなる。話を聴いてもらう中で自分の答えが見つかる」といふ。

小西さんのようなチャプレンは、国内では専従で五人、兼任で二十人ほどいるという。小西さんは「米国のケアをそのまま持ち込むのは適当ではないが、チャプレンの必要性という点では日米共通している。日本の宗教性や文化を考慮したケアを行ってほしい」と話している。

北海道新聞・朝刊
2007年11月29日（木）



ホスピス医 細井順さん (56)

滋賀県のウォーリス記念病院に勤務しているホスピス医、細井順さん（56）は3年前、自身が腎臓がんの手術を受けました。細井さんは、がん患者としての体験を、医師と患者との関係を見つめ直す機会になったと話します。避けられない死の前で、患者さんが「今日はよかった」と思う積み重ねが、明日への希望につながると話します。

（佐久間修志）

自身は午前9時から10時くらいが一番良かった。それに、手術があんなに痛いとは思わなかった。今は痛くないと聞きますが、やっぱり痛い。それなのに、かつては「手術後はなるべく歩いた方がいい」といふので、患者さんに話していただきました。心の中で過去の患

とか。向こうが医師みたい。私には、医師としての知識はありますが、経験者の言葉は、知識よりも重い。経験者に言われると、本当に「ああ大丈夫なんだな」と思えました。

重荷が100kgあったら、それを削って重さを減らします。ホスピスは100kgは減らさないが、手を差し伸べて一緒に重荷を担うのです。

だから、ホスピスでは頑張らなくていい。社会生活では、自分のことをできない人は非難されます。で